
トゥレット症候群のお子さんにみられる汚言(おげん)について

お子さんたちの汚言について、少し詳しく書いてみます。ご参考になれば幸いです。

2026年4月

北新宿ガーデンクリニック 星加明徳

I. 私の小児科医としての経験

昭和48年(1973年)に東京医科大学を卒業して、小児科の医局に入局しました。きびしい指導医の先生にしごかれながら、初期研修医として目が回るような生活が始まったのですが、入局して半年くらいたったとき、恩師の教授から電話があり「星加君、手があいたら私の部屋にきてください」と言われました。医局の生活では、教授からの直接の電話は、遠くの病院への出張など、だいたいろくでもない話が多いので、ドキドキしながら教授室に行くと「きみの外来にチックの子どもたちを集めるから、症状や経過をまとめてください」と言われました。そのときは“チックはまばたきや首をふる動きで子どもに多い”ということくらいしか知りませんでした。

当時は大学院生だったので小児科の中でも注目されていた分野、たとえば心臓病とか神経疾患とかで研究してみたいとは思ってはいいたのですが・・・“えっ、チックを調べるの～”とちょっと驚いた記憶があります。図書館に行って、中央医学雑誌でチックのことを検索すると、最初に見つけたのは激しい全身のチックだけでなく自傷、他害で日常生活が困難な大人の重症患者さんの治療経過を報告した論文でした。そのとき初めて汚言を含むことばのチックがあることを知りました。

そのころからチックのお子さんの診療を担当するようになって経験が増えてくると、汚言が出てしまうお子さんたちとも出会うようになります。ただ小児科医として診療していると、精神科の先生方が書いた論文に出てくる日常生活が困難なすごく重症の患者さんは、いないわけではないのですが、ごく少数でした。

ここでは小児科を受診したトゥレット症候群のお子さんたちの中で、汚言のあった子たちの特徴をまとめてみました。

Ⅱ. どのようなものを汚言としたか

私が診察のなかで汚言と考えるのは・・・

- (1) トウレット症候群の経過中であること.
- (2) その出現は・・・
 - ① ひとり言のように突発的に出現する.
 - ② 会話の中に不自然に, 脈絡無く, 突発的に混在する.
 - ③ 連続して出現(反復)することがある.
- (3) 発音は・・・
 - ① 最初は聞きとりにくいが, 強く出ると“ことば”として聞きとれる.
“バカ”ということばは, 最初は“バツ, バツ”という不明瞭な音ですが,
強く出ると“バカ”ということばとして聞きとれます.
 - ② 速さやイントネーションが不自然
- (4) 状況で誘発されることがある.
今言っちゃダメ・・・という瞬間に出る.
先生に叱られていて「バカ」
お母さんが夕食の準備をしている横で「マズイ, マズイ」
学校の廊下で女の子とすれちがって「パンツ, パンツ」
- (5) 状況で抑制されることがある.
家庭で出現していても, 学校では抑制されることが多い.
くわしく経過がわかっているトウレット症候群128例の中で,
お母さんが汚言に気づいたのは12例
診察室で汚言を聞いたのは4例
学校で汚言に気づかれたのは, そのうち3例

森谷寛之先生の書かれた「チックの心理療法」(金剛出版1990年初版)の中に、「汚言は状況と無関係に不随意的に叫ぶ」「ことばの発声のパターンは, 日常的発声とははっきり区別できる」と書かれています. また金生由紀子先生は「チック・トウレット症の理解と支援」(岩崎学術出版社 2025 初版)で, 「バカなどとののしることばのコプロラリアは, 相手に向かって言っているようなイントネーションや文脈内の位置づけではなく, あたかも咳払いのように会話の合間に突如として発せられる」と記載しています.

お二人の先生方が書かれているように, 汚言の出現は独特で, お子さんが小さいときからみているお母さん方は, 汚言の不自然な出現と独特の発音はすぐ気づくようです.

Ⅲ. 汚言はどのようなことば？

男の子44例、女の子12例、合計56例のお子さんたちで、二人以上で認めた汚言を示しました。バカ、死ねが多いのは、男の子も女の子も同じです。ただオッパイだけは男の子に多いという特徴があります。またいやだということばは女の子の3人だけでした。

汚言(二人以上で認められたもの)

	男の子	女の子	合計
死ね	19	6	25
バカ	15	9	24
オッパイ	12	1	13
セックス	4		4
いやだ		3	3
クソばばあ	2		2
エロ本	2		2
この野郎	2		2
だまれ	2		2

この調査をする前は、汚言はバカ、死ね、クソばばあが多いだらうと思っていました。調べてみて、バカ、死ねが多いのは予想どおりだったのですが、オッパイが3番目だったのは意外でした。56例のお子さんのうち、オッパイという汚言のあったのは男の子は12例、女の子は一人だけで、男の子がほとんどでした。この13例の年齢は4歳から10歳で、バカ、死ねのお子さんたちよりは少し年齢が低めでした。この12例の男の子たちのなかで、退行現象(赤ちゃん返り)が8例で認められていました。このまとめをしているとき、おもしろい記事を見つけました。

TBS NEWS DIG 2024, 7, 18

5歳の男の子がお母さんのスマホを使って、「女の子 オッパイ」で検索…ことばを失った母…
専門家のコメント「言い分を聞き本人に納得させて“これはダメだよ”と…」

想定外のできごとに愕然としたという母親の声は、瞬く間に拡散。

「さすがに早すぎませんか」「危機感持って」「さすがに気持ち悪いね」などの否定的意見から「精神の成長は人それぞれ」という励ましのことばまで、1500件近くのコメントが寄せられました。

男の子のオッパイという汚言は、男の子たちのところの中にあるお母さんの乳房に対するあこがれのようなものが背景にあるように思います。

汚言で一人だけでみられたものを示します。このように書き出してみると、汚言はかなり多彩なことばであることがわかりますし、短いことばだけでなく、長いことばもあります。

汚言(一人だけで認められたもの)

男の子

短いことば

やめろ、くたばれ、パンツ、エロ、チンチン、ちくしょう、デブ、いやん、イヤイヤ、オナニー、チクビ、ちんげ、チンコ、うるさい、クソ親父、ちがう、ウンチ、ちくしょー、ラブホテル、ブラジャー、貴様、ふざけんな、ババア、はだか、ペニス

長いことば

ウンチ出すよオムツだよ、なんでそんなことやってんの、調子にのるな、バーカじゃねーの死ねよ、オッパイ出てきたの、ブラジャーしてるの、胸大きい、オッパイこらしよ

女の子

短いことば

やだ、ざけんなよ、このやろー、どうでもいい、ウンコ、カンチョー、バカヤロー、チンチン

長いことば

冗談じゃない、〇〇さん死んで

汚言の中に長いことばがあることに気づいたとき、“これは大発見かも！”と思ったのですが、トゥレット先生の論文の中には、ちゃんと長いことばも記載されていました。

精神医学20(9)1019~1028, 1987 精神医学20(10)1125~1135, 1987

「ああ、この野郎、自分の仕事もしないで、自分の仕事もしないで・・・」

「アッ、この老いぼれ・・・ 父さんXの・・・ この老いぼれ・・・」

「アッ、淫売婦、オレはお前を・・・ お前にはあるはず・・・」

トゥレット先生の論文は、1885年にフランスの医学専門誌に掲載されています。今から140年も前に、チックの独特の動きとことばの組み合わせに気づいて1つの病気だと提唱したのは、すごいことだと思います。

IV. 重症度と汚言

トゥレット症候群の重症度評価としては、シャピロのトゥレット症候群重症度尺度があります。

これは重症度を、きわめて重度, 重度, 著明, 中度, 軽度, きわめて軽度 の6段階に分けるものです。この汚言のあった56例のお子さんの重症度を示します。

汚言というと、重症のイメージがあるのですが、汚言のあるお子さんの数が増えてくると、重症の子でなくても汚言が出ることに気づきます。56例のお子さんたちの重症度をみると、中度以下のお子さんも30名、約半数いることになります。

	男の子	女の子	
きわめて重度	1	1	2
重度	3	6	9
著明	10	1	11
中度	19	3	22
軽度	2	4	6
きわめて軽度	2		2
合計	44	12	56

この結果をみて、私自身、軽度ときわめて軽度のお子さんたちのバカ, 死ねということばが本当に汚言だったのか… という心配が出てきました。それできわめて軽度の2例, 軽度の6例のお子さんたちの経過を見なおしてみることにしました。

V. 運動性チックと音声チックが出てくる順番

トゥレット症候群のお子さんたちの経過をみていると、運動性チックはまばたきや顔をしかめるなどの顔面の動きから始まって、首の動き(首をふる), 手の動き(触る, 叩く, ピクツとする)などがみられるようになり、さらに広がると体の動き(くねらせる, のけぞる), 足の動き(飛び上がる, 蹴飛ばす, 足を踏み鳴らす)などが出てきて、チックの強さがピークになるときは全身の動き(硬直する, ブルブル震える, ピクツとする)などがみられるようになります。

音声チックは、鼻症状(鼻をすする), 咳払い, 奇声(アッ, アッという叫び声)などが初期にはみられやすく、強くなると反響言語(オオム返し)や反復言語(ことばのくり返し), イントネーションの変化などのことばの変化が出てきて、さらに強くなると汚言が出るようになります。

運動性チックや音声チックの経過の中での変化は、お子さんたちが持っているチック出現力

(チックの出やすさ)の強弱と神経学的なチックの出現閾値(どの強さでそのチックが出るかの臨界点)の水準によって作られていて、出現力の弱いお子さんは、出現閾値の低い(出やすい)まばたきなどの顔の動きや手の動きだけで、出現力の強いお子さんは出現閾値の低い顔や手の動きだけでなく、閾値の高い(出にくい)足の動きや全身の動きが出るのだと思います。これは声のチックについても同じで、出現力の弱いお子さんは、最初は出現閾値の低い鼻症状や咳払いで、少し強くなると奇声やことばの変化が出て、さらに強くなると汚言が出ます。また経過の中では動きのチックが足や全身に広がるときは、声のチックも並行して汚言まで進展していく傾向があります。重症度がきわめて軽度と軽度の8例のお子さんたちの汚言も、このような神経学的な規則性の中で出てくるのか、調べてみました。

表に軽症群8例のお子さんの汚言を示しました。重症のお子さんと同様にバカ、死ね、オッパイなどを認めます。

軽症群8例のお子さんの汚言

	男の子	女の子	合計
死ね	1		1
バカ	1	3	4
バカ野郎		1	1
オッパイ	1		1
ペチャパイ	1		1
デブ	1		1
イヤだ		1	1

この子たちの汚言の出現前後にみられた音声チックを示しました。男の子も女の子も、汚言の前には咳払いや奇声、反響・反復言語などが出ており、汚言だけが突然出てくるわけではありません。

男の子4例

	汚言に先行	汚言に続発	合計
咳払い	2		2
奇声	2		2
反響・反復	2	3	5
意味の無いことば	1	1	2
イントネーション変化		1	1
舌打ち	1		1

女の子4例

	汚言に先行	汚言に続発	合計
咳払い	2		2
奇声	3	1	4
反響・反復	1		1
意味の無いことば			
イントネーション変化	1	1	2
舌打ち	1		1

この結果からみると、軽症群のお子さんたちにみられるバカ、死ねということばは、それが出現する前に、咳払いや奇声、反響言語(オオム返し)などがみられているので、これもチックの汚言と考えてよいように思います。ただこのお子さんたちの汚言は、家庭では頻回にみられていても、学校ではほとんど出ませんし、短期間で消えてしまいます。

日常生活にこまり感が無ければ、汚言がおうちで出ていても、しばらく様子見でよいと思います。

このページに記載した内容は、第31回および32回トウレット研究会で発表したものの要約です。